

とく
徳

ほう
朋

自分に出会う場所が人生

よつつじ あきら
四衛 亮



よつつじ あきら
1958—現在
岐阜県生まれ。真宗大谷
派不遠寺住職。真宗大谷
派青少幼年センター非常
勤研究員

人間は、人生について希望や思い、考えや予定をたくさんもちます。それも**煩悩**を土台としていろいろもつわけです。しかも個人的な**煩悩**だけでは済まず、その時代や社会が持っている価値観に動かされます。「これは素晴らしい、そうありがたい」と考える事も、自分だけで考えているのではなくて、その時の社会の状況や価値観に動かされているのです。(中略)テレビやマスコミが報道しなければ全然知らないし、忘れてしまうのです。だから時代や社会によって、私たちは世の価値観に動かされていきます。まさに**寄り起こ**ってきたことを、私たちは自分として生きているのです。

つまり『**歎異抄**』は、人生は自分の思いや希望を叶える場所ではなく、**寄り起こ**ってきたところに自分があるのだから、**寄り起こ**ってきた自分を受け止めて、「それが私なのです」と自分自身の問題に向き合って、自分を投げ捨てずに生きていく事を伝えています。希望や思いを中心に「ああでなければならぬ」「こうでなければならぬ」ということばかりを考えれば、言えは言うほど、そうでない自分やそうでない他人は全部切り捨てていくこととなります。「こうあるべきだった」「あんなふうになりたかったのに」といって全部切り捨てていけば、最後は自分をすべて捨てていかなければなりません。人間が人間を**疎外**していくことにもなります。

そのように自分を投げ捨てるような思いで生きていくのか、寄り起こってきたことを自分として受け止め、そこにある問題を当事者とし、我がことと受け止めて、その問題に向き合って一歩一歩丁寧に生きていくのか。どういう態度で人生に向き合うのかということが『歎異抄』の課題なのだと思います。縁を自由に選ぶことはできないのです。

「こうあれば、あああれば」とお願いしてお参りすれば、それが叶うという宗教が多いのですけれども、それは叶うかどうかわかりません。むしろ人生は自分の思いや希望を叶える場所ではなくて、寄り起こってきたことを私自身の我がこととして受け止め、それを引き受け生きていく、自分自身に出会う場所が人生なのです。「いつもいつも新しい自分に出会い、その自分から目を逸らさずにそこを生きていく」「自分に出会う場所が人生である」、そのことに気が付きなさい、と私たちに寄り添い願いをかけ、呼びかけているのが如来の本願です。そういうことを『歎異抄』は開いているのだと思います。私たちは自分の思いや希望を生きることが自分だと思っていますから、そのような目覚めた世界から呼び掛けられないと、こんな自分は、あんな自分は、と残念無念で捨て去った自分の山を築いて人生を終わっていくことになってしまいます。そうではなく、本当に目を覚まして自分をいただいて生きていく。そういうところに『歎異抄』の人間観というものが表現されているのではないかと思います。

(『歎異抄の世界をたずねて』)



境遇を選べない私たちですが、寄り起こった境遇を大切に意味を見いだしていくことが願われていることだと思います。「(哲弘 拝)



この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。